

以下、海底遺跡と文献を示して考察してゆこう。

### 海底に遺跡がある

まず陸地に見いだせる古い遺跡から述べる。先に述べた多賀城市八幡の歌枕「沖の井」（沖の石）は、大昔、大河が流れていた痕跡である。その大河は今七北田川や砂押川となって仙台湾に注ぐ。河口の痕跡はさらに見いだされる。その一つは仙台湾に突き出た七ヶ浜町の深川沼や阿川沼である。細長い形状は大河であった証拠である。

ところで、その深川沼・阿川沼から北東に行った岬の突端に、「鼻節神社」がある。『続日本後紀』承和十一年（八四四）八月一七日条に「无位鼻節神」に「從五位下」を授けたとあり、『延喜式』に記載された式内社である。不思議なことに、百段ほどの急な石段があって海中へ続いている。いつ造られたのか確認できないが、だれがこの石段を降りて海に入ったのだろうか。また海から上ってきたのだろうか。考えられるのは、石段の向こうに平安時代の遺跡が眠っているのではないか、ということだ。

この境内には、八幡神の小さな社殿が建っている。ま

た、「おつぼねさま」とよばれる大きな石があり、その右隣には「大根大明神」の石祠が二つ並んでいる。「東大根大明神」と「西大根大明神」である。古老たちの語る伝説によれば、二つの大明神は、かつて一〇キロメートルほど向こうの海上に大きな島があり、そこに祀られていた。その島は「鼻節神社」の奥院といわれており、大地震と大津波によって島もろともに海中に沈んでしまった。その二つの明神を現在地に祀ったのだという。この伝説はそうとう広い地域に流布しており、七ヶ浜町から海を越えて対岸の塩竈市でも語られている。私の親や親戚の老人たちも、子どものころから聞かされたという。

というわけで、研究仲間と綿密に計画を練り、各種の観測機材を揃えて海中に潜り、「大根堆」を調査してみた。七ヶ浜から約八キロメートル沖合である。以下、GPSとソナーによる海底地形図や観測結果の科学的データ等は論文に書いたもので、結果だけをごく簡単に報告することにした（注3）。

「大根堆」の最も高嶺のあたりから六、七メートルほど潜ると、ある程度平らな場所に到着する。そこから高嶺のほうを見上げると、海面から三メートルほどであ

る。頂上には約五〇センチほどの石段が続いている。その昔、海上に一五メートルほど突き出た島だったならば、島の頂上にあたるだろう。さぞかし見晴しがよかつたに違いない。

あたりを見回すと、所々に直径一〇メートルほどの大きな穴が開いている。奥行きは二、三メートル。中には入ると大きな石が二、三個あり、まわりに大小様々な石が転がっている。円いもの、楕円、四角、三角の石があり、あきらかに人工的な作物と思われる。

横のほうに開いている穴もある。そこを降りてゆくと、水深二〇〜二五メートルで砂場に到着する。人工的に造ったものに違いない。しかも、掘削したような痕がある。灌漑用の水路と思われる溝もある。井戸のような穴もある。

島の頂上と思われるところから、東回りに水深一〇メートル付近を調査すると、五メートルほど切り立った崖がある。上から見ると底が見えない。ライトを照らしながら降りて北に向かって進んで行くと、しだいに広くなり天井部分に大きな円い穴が開いたところに着く。「大根大明神」の祠なのだろう。一〇メートルほど進んでみると、高さ五メートル、幅二〇メートル、奥行き七メー

トルほどの岩窟である。奥を見ると、棚のような岩層が突き出て、平らに削つてあるように見える。御神体の石を置いたのだろうか。まわりの窪みには、御神体に使われたと思われる赤みがかった円筒状の石がたくさん立っている（注4）。なかには転がっているものもある。

暗闇の岩窟に光がさしこむと、竜宮城のような夢幻空間に一変する。頭上に真紅の波がさざめき、魚たちは色とりどりの鱗をきらめかせて泳いでいる。

### 地震で陥没した

ここが「大根大明神」の祠に違いない。東西二つあったその東側の祠だろう。地震によって島全体が陥没し、このような海底遺跡になったと考えられる。紹介しないが、このほかにも様々な遺跡・遺物が見いだせる。古墳とも思われる石組（玄室）も半ば露わになった状態で発見された。

プレートテクトニクス理論によれば、津波は一般に逆断層の亀裂によって地震波が発生し、深さ七〇〇メートルの日本海溝で跳ね返ってきて大きな力を出す。この場合は水深一〇〜一五メートルに遺跡があることから、島全体とその周辺が一挙に陥没したに違いない。海岸線